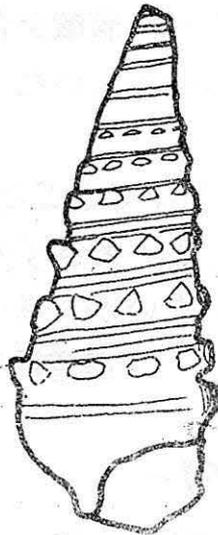


とかされた貝がら

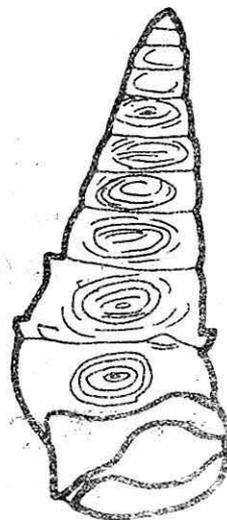
不思議な貝がらの発見

富山県の八尾町は、マングローブ沼に特有な貝類化石がたくさん出てくることで全国的にもよく知られ、毎年たくさんの化石の研究家や愛好家が訪れます。八尾にマングローブ沼があったのは今からおよそ1500万年前です。マングローブというのは熱帯や亜熱帯地方の河口部や海岸線に広がる樹木のことで、その地面は潮の満干で海水が浸ったり乾いたりする泥沼になっていて、多くの種類と量の貝類がいます。

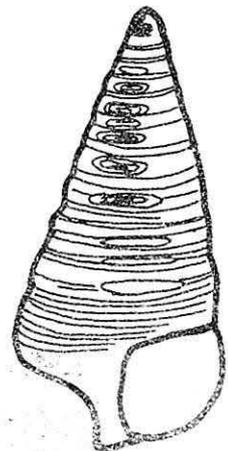
ある時、私は八尾の砂の地層の中から奇妙な貝化石を見つけました。ビカリヤとよばれる巻貝であることは形からすぐわかったのですが、からがつぶれて、おまけにビカリヤの特徴であるとげとげの突起が表面にはほとんどありません。さらにつる



正常な八尾産の
ビカリヤ



とかされた八尾産の
ビカリヤ



現生のセンニンガイ

つるの表面には、木の年輪のような模様が見えるのです。からがとかされたのだろうと想像はできましたが、なぜからがこのようなになったのかはわからないまま、しばらく時がたちました。

現生の貝がらに同じものがあった！

その後、当館に収蔵されている津田^{かりゅう}禾粒コレクションの中の現生の貝がらを調べていた時、ジャワ島やニューカレドニアなど南方のマングローブ沼にすむセンニンガイとよばれる巻貝の中に同じようにとかされた跡を持った貝がらを発見しました。

さっそく、その巻貝を採集された津田先生にお聞きすると、熱帯のマングローブ林の泥沼では、洪水などで表面が削られて、中の土が空気にふれると鉄イオンやイオウイオンを使ってエネルギーを得ているバクテリアが繁殖^{はんしょく}するのだそうです。その時、バクテリアによってイオウイオンが酸化して硫酸^{りゅうさん}ができるため、貝がらがとかされたのだということでした。

過去のできごとを知る

偶然見つけた奇妙な貝化石から、大昔、亜熱帯だった八尾のマングローブ沼には、けずりとられた泥からしみ出た硫酸を含んだ水たまりが広がり、とかされた貝がらが散らばっていたことがわかりました。

このように化石となった生物が、過去にどのようなできごとを経験してきたのかを知るためには、化石に残っているきずや模様などの跡と同じような跡が、現在の生物にもないかを調べて、現在から逆に過去を考えてみるのです。（後藤道治）



富山市科学文化センター

〒939 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764)91-2123

平成7年10月1日発行